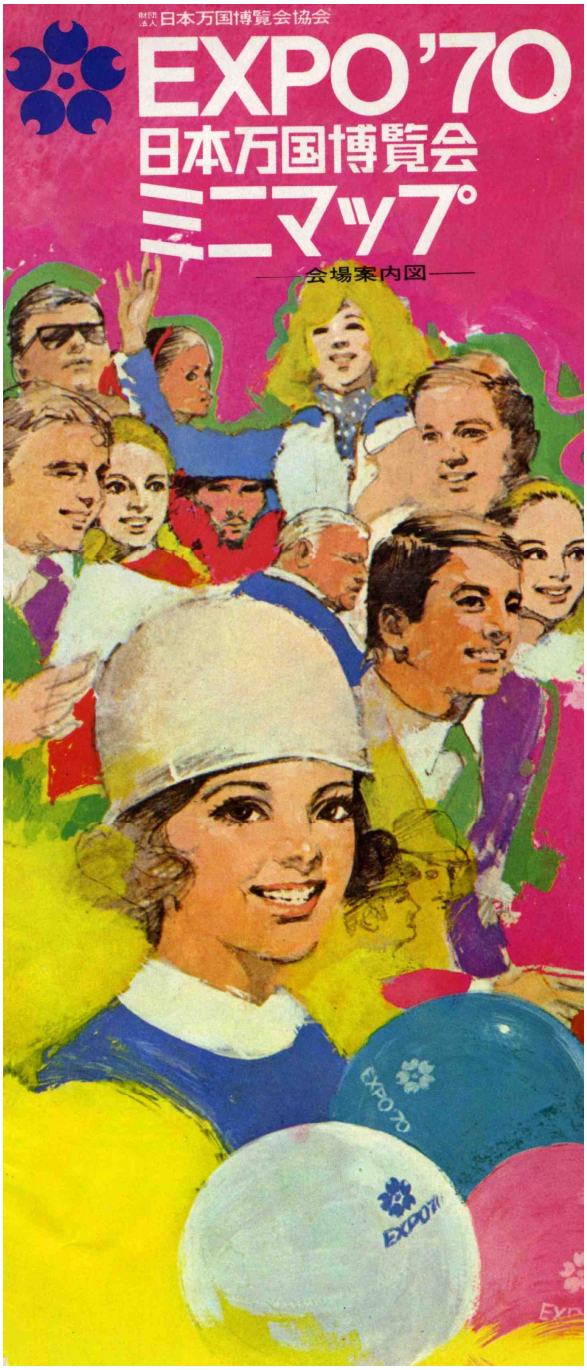
総合博物館
青森県立郷土館だより
News from the Aomori Prefectural Museum

通巻144号　平成20年（2008）8月1日　Vol.39 No.2

よみがえる昭和40年代
～特別展「団塊世代の青春時代」～



昭和30年代にはじまった消費ブームにより、白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫の「三種の神器」が一般家庭に普及しました。続く昭和40年代には、カラーテレビ・自動車・クーラーの「3C」が登場します。モータリゼーションの急速な進展は、ライフスタイルに大きな変化をもたらしました。街頭プロレス中継で人気をつかんだテレビは、昭和30年代の明仁皇太子ご成婚、東京オリンピックなどを通じて家庭に入りこみ、昭和40年代には一家団欒の中心として定着しました。人気番組のキャラクターや斬新なCMが人々の消費志向に影響を与えました。

昭和40年代は、いわゆる「団塊の世代」(だんかいのせだい)が青春を過ごした時期です。昭和50年代前半にかけては、団塊ジュニアの誕生ラッシュがありました。親子だけで構成される「核家族」が増えたのもこの頃です。彼らは都市部にマイホームを求め、その消費を当てこんで、郊外型のショッピングセンターが登場しました。本展では「テレビと消費」に焦点をあて、当時のライフスタイルをふり返ります。また関連企画として、記念講演会やギャラリートークも実施します。夢多き昭和40年代を思い起こしていただきたいと思います。　（竹村俊哉）

【会期】7月25日(金)～9月28日(日)　9:00～18:00
※会期中は無休
【料金】一般500円 高校・大学生240円 小・中学生無料

◇記念講演会
第1回　8月10日（日）13:30～
「プラモデルに熱中したあの頃」横山一敬氏(ATV営業局長)
第2回　9月21日（日）13:30～
「私にとっての昭和40年代」
講師 川口浩一氏(ATV青森テレビ報道制作局放送部長)

◇ギャラリートーク
第1回 8月24日（日）13:30～14:00
「三沢高等学校の甲子園大会準優勝」
講師　本田伸（青森県立郷土館主任研究主査）
第2回 20年9月14日（日）13:30～14:00
「青森県立郷土館の開館」
講師 小山隆秀（青森県立郷土館学芸主査）

◇ＡＴＶスタジオ再現コーナー(ニュースキャスター体験)
8月3日・10日・17日・9月7日・14日(各日曜、計5回)

土曜セミナー　青森県の火山活動

学芸主査
島口　天

地下のマグマなどが地上に噴き出す「噴火」によってできた山を火山といい、このうち概ね過去1万年以内に噴火した火山および現在活発な噴気活動がある火山を「活火山」という。火山には美しい景観をつくる元になっているものも多く、日本の風景を代表することもある。また火山は、その熱を使った地熱発電や温泉、その火山灰が積もって畑作に適した土地など、私たちの日常生活を足元から支えてくれる存在でもある。青森県の活火山は、岩木火山、八甲田火山群、十和田火山、恐山火山である。

八甲田火山群は南八甲田火山群、八甲田カルデラ、北八甲田火山群からなり、南・北八甲田は安山岩の溶岩と火山灰を繰り返し噴出してできた成層火山群である。

恐山火山は、北西から南東方向に連なる釜臥山(かまぶせやま)・障子山・屏風山・大尽山(おおつくしやま)・円山・朝比奈岳からなる火山群で、中央にあるカルデラの中には直径2kmの宇曽利山湖(うそりやまこ)がある。

岩木火山は、安山岩の溶岩や火山灰を何度も噴出してできたほぼ円錐(えんすい)形の成層(せいそう)火山である。山頂部はデイサイトの溶岩ドームからできている。

岩木山（岩木高原から望む）

十和田火山は、十和田湖を囲む直径11kmのカルデラで、多量の火山灰と火砕流を噴出したことで陥没してできた。

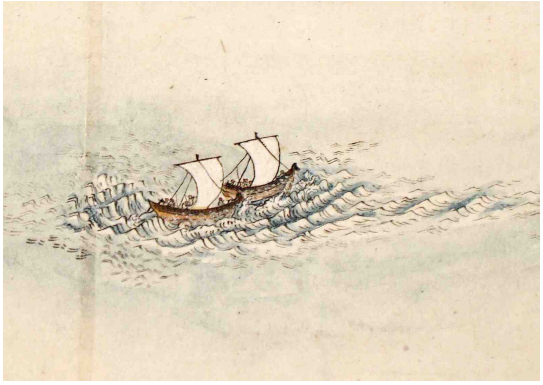
気象庁は、札幌・仙台・東京・福岡の各火山監視・情報センターで、全国108の活火山の活動状況を監視している。県内の火山観測は、弘前大学理工学部附属地震火山観測所が昭和56年(1981)に設立され、地震予知・噴火予知のための観測と研究を行っている。

（4月19日／当館小ホール）

津軽海峡を渡る船－「青函連絡船なつかしの百年」　学芸課長　昆政明

津軽海峡は海の難所と考えられていた。天明８年（1788）、幕府巡見使に随行して東北・北海道を旅した古川古松軒は著書『東遊雑記』に、三厩から松前に渡海した経験を記している。

海峡には「竜飛鼻潮」「中の潮」「しらかみの潮」という３つ潮が、西から東に向かって流れており、その中でも「中の潮」は、「竜飛鼻潮」と「しらかみの潮」の別れがぶつかり合うので、逆浪が立ち上がり方向が一定せず、操船を間違うと非常に危険である。古松軒は、まさしく「日本第一の瀬戸である」と述べている。



中の潮を越えて松前へ向かう船（秦檍麿「大日本国東山道陸奥州駅路図」より　青森県立図書館蔵）

しかし、三厩から松前への渡海は、十分に日和見（ひよりみ＝好天を待つこと）して安全を確認した上で航海するため、遭難事故はほとんど起こっていないという知識を、船乗りから聞き出してもいる。

巡見使一行を乗せた渡海船は百石積の館（屋形）船で、幕を張り巡らし、鳥毛の長柄（ながえ）、吹貫（ふきぬき）、のぼり等の装飾をしていた。弘前藩が用意した小船に曳かれて竜飛の鼻（岬）に至り、ここで装飾をはずして渡海の準備にかかった。梶（かじ）取り者は梶に身を固定し、船頭の太鼓の合図で帆を上げ、松前に向かった。

海峡を渡る時、南風では東に流され箱館（函館）に向かうしかなくなるので、東風の強いときに船の舳先（へさき）を小島（松前小島）の方に向け、潮に逆らって西へ進み、松前に入る、と説明を受けている。古松軒は船室から出て外を眺め、潮にもまれ、打ち込む波の飛沫を身に浴びながら沿岸の景観を観察した。その生き生きとした記述から、海の難所を行くこの紀行家の高揚感が伝わってくる。　（6月15日／記念講演会）

ものは語る　～蓑虫山人「暗門山三面瀑布之図」～

　このたび当館に寄贈された「暗門山三面瀑布之図」は、かつて当地に滞在した蓑虫山人（みのむしさんじん、天保7／1836年～明治33／1900年）の作品で、明治10年代半ば頃のものと考えられます。三つ（三段）の滝からなる名勝「暗門の滝」（西目屋村）を描いた作品です。

　蓑虫は美濃国（現岐阜県）の出身で、本名は土岐源吾といいます。ほかに蓑虫仙人、六十六庵主人、七十二県庵主人とも号しました。幕末から明治にかけて、全国を旅した画人（絵師）です。

　豪農の家に生まれた蓑虫は、10代半ばに出奔し、再び郷里に戻るまでの約48年間、九州・東海・近畿・北東北を漂泊（ひょうはく）しました。「明治」という新しい時代の中で、笈（おい）を背負って名勝旧蹟や名士たちを訪ね歩く旅は、独特の画風で絵に記録されています。当時の風景・風俗や滞留先の様子を、時に自らの姿を織り交ぜながら描いています。そこからは、様々な情報を読み取ることができます。

　蓑虫は特定の師につくことなく、ほぼ独学で、画人としての技量を身に付けました。旅先で出会った様々なモノをよく観察し、デッサンすることで、磨かれたと言えるでしょう。実際の見聞を描くことによって自らのセンスを鍛えていった「放浪の画人」でした。青森県には明治11年（1878）頃に足を踏み入れ、同20年頃まで、下北地方及び津軽地方を中心に滞在しました。多くの作品が県内各地に残されています。

　ある時期から土器や石器などの考古資料に深い関心を寄せるようになり、その記録・収集に情熱を傾けていきました。本県滞在中に旧木造町（現つがる市）の亀ヶ岡（かめがおか）遺跡の発掘を手がけ、世間に紹介したことはよく知られています。当地の遺跡や考古遺物の多様さ・豊富さは、郷里に博物館建設の夢を抱いていた蓑虫にとって、立ち去りがたい魅力となったといわれています。

　青森県の豊かな自然とそこに根づいた歴史、そして郷土を愛する人々たちとの知的な交流が、彼を惹（ひ）きつけたのでしょう。

（太田原慶子）

紙本着色　261.0cm×46.5cm

嫁コが授かる…!?

　毎年7月15日、弘前市のある集落では、産土（うぶすな）神社に祀られている神仏像数体を輿（こし）に乗せ、山中の清水へと運ぶ。そこは遠い昔、寺院があったと伝えられる場所なのだ。

　儀式のあと、神仏像は再び集落に戻されるが、その中の一体は箱に入れられて、ひとりの若者が背負って、家々を門付（かどづ）けして歩く。

　この役を務めると「嫁コが授かる」といって、皆、争ってやったという。

　この若者も良い御縁を授かっただろうか。補充調査が楽しみだ。

（小山隆秀）

この一枚

神像を背負う若者（平成20年／弘前市）

平成20年度行事予定（平成20年8月～11月）

○特別展・企画展
7/25(金)～ 9/28(日)
「団塊世代の青春時代～よみがえる昭和40年代」
10/11(土)～11/16(日)
「ジュディ・オング 倩玉 木版画の世界」
11/22(土)～ 1/18(日)
「蓑虫山人と青森～放浪の画家が描いた明治の青森」

○連携展
十和田市立新渡戸記念館
8/1日(金)～9/30「太素塚 生き物歳時記」
ゆ～さ浅虫(「道の駅」浅虫温泉)
10/24(金)～11/9「麻を着る歴史」

○催し物
夏休みこどもの国 8/ 3(日)「金魚ねぶたづくり」
8/17(日)「化石レプリカづくり」
秋の自然観察会 9/21(日)「草花で遊ぼう」

○土曜セミナー（8月～11月）
8/ 9 狩りをするハチたち
8/16 臼(うす)の仲間たち
8/23 1960年代若者の反乱と故郷探し
8/30 北日本の激動の時代～防御制集落と平安時代
9/ 6 いたこはマリリン・モンローを口寄(おろ)せるか
9/13 トドマツとアオモリトドマツ
9/20 蓑虫山人の描いた青森
9/27 漁労と食生活の移り変わり(5)
※10月以降の期日・テーマ・講師は未定
※8・9月の会場は青森市福祉増進センター「しあわせプラザ」研修室

○「団塊世代の青春時代」記念講演会
8/10(日)横山一敬氏「プラモデルに熱中したあの頃」
9/21(日)川口浩一氏「私にとっての昭和40年代」

国絵図特別公開

当館所蔵の「陸奥国津軽郡之絵図」や「弘前并近郷之御絵図」など、ふだんは展示できない大型絵図5点を、4月26日(土)～5月6日(火)の期間限定で特別公開しました。来場者は背丈をはるかに超える国絵図の巨大さに目をみはり、オペラグラスで観察していました。解説会も盛況で、大型絵図が作られた背景について熱心な質問がありました。期間中、昭和初期の貴重な近代建築で登録有形文化財(建造物)の当館旧館部分(旧青森銀行本店)も特別公開され、好評を博しました。

青函連絡船なつかしの百年

今年は青函連絡船の就航100年、終航20年に当たります。津軽海峡の交流の歴史と青函連絡船の栄光の時代をふり返る企画展「青函連絡船なつかしの百年～海峡を渡る船と人」は5月16日(金)～7月6日(日)の日程で開催されました。来場者は4500名を超え、連絡船の衰えぬ人気ぶりを示しました。連絡船の写真を撮り続けた鎌田清衛氏・対馬昭夫氏も会場を訪れ、思い出を語っていました。企画展の様子は6月8日(日)の県広報番組「活彩あおもり」でも放映されました。

写真:八甲田丸模型／森内四郎制作／ＲＡＢ青森放送

考古展示室リニューアル

考古展示室では県内での新発見や研究の成果を紹介するため、2年前から展示品の入れ替えを進めています。約660点の4割にあたる270点が新しくなりました。全面入れ替えの「装飾品」展示ケースではヒスイ・水晶・貝製品が、美しさと存在感を持って輝いています。新設の「森の恵み」展示ケースにはクマやイノシシ、クルミやキノコなどの土製品を収めました。さらに発掘現場の臨場感が伝わるよう、縄文前期の墓の模型や貝塚の貝層断面も展示しています。

写真:東北町東道ノ上(3)遺跡出土貝製品／県埋蔵文化財調査センター

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol.39 No.2 通巻144号 2008.8.1
【編集・発行】総合博物館 青森県立郷土館
〒030-0802 青森市本町二丁目8-14
【TEL】(017)777-1585(代)【電子メール】E-KDGAKUGEI@pref.aomori.lg..jp
【ホームページ】http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/culture/kyodokan.html